

要件定義技法ガイド

別紙：要件検証の観点一覧（業務要件定義）

第1.10版

2018年08月29日



この作品は [クリエイティブ・コモンズ 表示 - 継承 4.0 国際 ライセンス](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/) の下に提供されています。
要件定義フレームワーク©2018 TIS INC. クリエイティブ・コモンズ・ライセンス(表示-継承 4.0 国際)

要件検証の観点一覧(業務要件定義)

成果物		区分		検証観点		重要検証 ポイント	検証タイミング	検証方法	影響例	備考
ID	名称	検証区分	特性区分	ID	内容					
—	(成果物共通)	関連	最新性	DG-000-2-01	最新のRFPおよび現行業務・現行システムの資料を元に業務要件定義成果物が作成されていること。	○	G4-01-02 業務要件の検証	「業務要件定義成果物」のインプットとしたRFPおよび現行業務・現行システムの資料が最新であることを再検証する。 ※要件定義計画時に、その時点で最新であることを確認済みの想定で、そこからの変更がないかの再検証となる。	現行と異なる業務・システムの情報をインプットにすることで、誤った業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			無曖昧性	DG-000-2-02	業務要件定義成果物で利用している用語が統一されていること。	○	G4-01-02 業務要件の検証	「業務要件定義成果物」と「用語集」の“用語名”、“禁止する同義語”を突き合わせ、「業務要件定義成果物」内で使用している用語にバラつきがないか検証する。 ※ツールを使って文書から抜き出した単語群をソート・曖昧検索などすると効率が良い。	用語の不一致によりステークホルダー間で業務要件の認識齟齬が発生し、誤った業務要件を定義してしまう可能性がある。	
DG-101	業務課題一覧	単体	完全性	DG-101-1-01	ビジネス目的・目標の達成に必要な、解決すべき業務課題が漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G1-03-02 ステークホルダーからの課題抽出	「業務課題一覧」の“ビジネス目的・目標”に対する“課題”を抽出し、検証する。 ※“DG-101-1-01”～“DG101-1-03”は、ロジックツリーなどを活用し、合わせて検証すると効率が良い。	ビジネス目的・目標を達成できない、価値のない業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			必要性 無曖昧性	DG-101-1-02	業務課題に対する改善目標・原因・解決手段が明確に定義され、解決手段は改善目標・原因に対して十分な内容であること。	○	G1-05-02 実現手段の定義	「業務課題一覧」の“課題内容”に対する“改善目標”・“原因”・“解決手段”の定義内容を検証する。 ※“DG-101-1-01”～“DG101-1-03”は、ロジックツリーなどを活用し、合わせて検証すると効率が良い。	業務現行課題を解決できる最適な解決手段にならず、効果の薄い業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			追跡可能性	DG-101-1-03	業務課題⇒原因⇒解決手段⇒改善目標の関連性が明確であること。	○	G1-05-02 実現手段の定義	「業務課題一覧」の各項目の関連性が正しく表現できていることを検証する。 ※“DG-101-1-01”～“DG101-1-03”は、ロジックツリーなどを活用し、合わせて検証すると効率が良い。	解決手段の発生元となる業務課題が不明確になることで、解決手段の必要性の判断が難しくなり、業務要件の優先順位付けを誤ってしまう可能性がある。	
			実現可能性	DG-101-1-04	解決手段は、業務やシステム、及びその運用面において、定義した制約や前提の元で実現可能であること。 (実現するために、未定義の制約や前提を必要としないこと)	○	G1-05-02 実現手段の定義	「業務課題一覧」の“解決手段”を検証する。	後続のプロセスや工程で実現不可能であることが発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
			一貫性	DG-101-1-05	解決手段は、他の解決手段と矛盾しないこと。 (解決手段が衝突しないこと)		G1-05-02 実現手段の定義	「業務課題一覧」の“解決手段”を検証する。 ※業務課題一覧では、解決手段の充分な具体化/詳細化が未の為、全ての解決手段を一気通貫で確認し、粒度が大きい明らかな矛盾が無いことを確認する程度でよい。詳細な検証は、業務要求一覧で行う。	後続のプロセスや工程で解決手段間の矛盾が発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
		関連	一貫性	DG-101-2-01	解決手段が、課題解決方針や業務改善方針と整合していること。	○	G1-05-02 実現手段の定義	「要件定義計画書」の“プロジェクト方針”から課題解決方針や業務改善方針を抽出し、「業務課題一覧」の“解決手段”と突き合わせて検証する。	後続のプロセスや工程で解決手段のプロジェクト方針との矛盾が発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
DG-102	実現手段方向性検討資料	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-201	業務要求一覧	単体	単一性	DG-201-1-01	業務要求の対象が1つであること。 (1つの業務要求が複数の要求を含んでいないこと)		G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”を複数要求に分割することで、要求内容をシンプルかつ具体的にすることや、“要求内容”による業務/システムへの影響把握がしやすくなるかなかを検証する。	複数の業務要求を1つの文章に含めることで、個々の業務要求が曖昧になり、誤った業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-201-1-02	業務プロセス・ルール・情報(データ)への影響が見えるレベルまで業務要求が具体化されていること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”に業務プロセス・ルール・情報(データ)への影響概要が説明されており、その内容と“関連モデル”列に定義された影響範囲が一致することを確認する。	業務要求をモデル化する担当者間で業務要求の認識齟齬が発生し、モデル化対象とすべき要求の漏れやモデルの誤りが発生する可能性がある。	
			一貫性	DG-201-1-03	業務要求は、他の業務要求と矛盾しないこと。 (要求内容が衝突しないこと)		G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”が、ある業務要求を実現すると、他の業務要求が実現できないような矛盾した内容になっていないことを検証する。	後続のプロセスや工程で業務要求間の矛盾が発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
			法令遵守	DG-201-1-04	業務要求は、法律や規制に準拠していること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	準拠する法律や規約を定義した資料と「業務要求一覧」の“要求内容”を突き合わせて検証する。	後続のプロセスや工程で、業務要求が法律や規制に準拠していないことが発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
			独立性	DG-201-1-05	業務要求は、ステークホルダーと共有されていない暗黙の認識を前提としていないこと。		G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”を検証する。 業務要求の内容やその妥当性、実現性等が、文書で明示されていない暗黙の認識や仮定を必要とせずに、成立することを確認する。それらを必要とする場合は、その旨が明記されていればよい。	誤った/不適切な暗黙の前提に依存した要求はおのずと不適切な要求となる。また、その前提がステークホルダー間で認知された時点で不具合・障害と判断されることがある。	
			実現可能性	DG-201-1-06	業務要求が、業務やシステム、及びその運用面において、定義した制約や前提の元で実現可能であること。 (実現するために、未定義の制約や前提を必要としないこと)	○	G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”を検証する。	後続のプロセスや工程で実現不可能であることが発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
			検証可能性	DG-201-1-07	業務要求が実現できたことを確認する明確なテスト仕様を作成可能であること。		G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”を検証する。	テスト仕様を作成できないような曖昧な要求が残り、後続工程で要求の具体化が必要になるなどの手戻りが発生する可能性がある。	
			無曖昧性	DG-201-1-08	業務要求内容が、複数の解釈が成立するような文章の曖昧さがなく、理解できること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」の“要求内容”説明文について、「修飾語が揃かる先」「句読点の打ち方」「代名詞が指す先」「使用する言葉」等の適切さを検証する。 作成者自身による検証が難しい側面があるので加えて、文章校正ツールを活用した日本語文章の校正や、他者との読み合わせ、などを行うと良い。	ステークホルダー間での業務要求の認識齟齬が発生し、誤った業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-201-1-09	プロジェクトが選択した、業務要求に対する要求属性項目(重要度、緊急度など)について、各業務要求ごとに属性値が明確に定義されていること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	「業務要求一覧」で、各要求に定義された“要求属性情報”の値が適切であることを検証する。 単体の業務要件での確認と合わせて、同値のグループ内外で比較確認を行うと良い。	業務要求の優先順位を誤って設定してしまう可能性がある。	
			一貫性	DG-201-1-10	業務要求の優先順位が、適切に定義されていること。	○	G2-03-02 業務要求の優先順位付け	「業務要求一覧」の“優先順位”を検証する。 優先順位づけルール自体の妥当性を確認する。また、優先順位は相対評価が必要なので、同優先順位等のグループ内外で比較確認を行うと良い。	プロジェクトリソース制約(コスト・期間・人)の範囲内に収まる業務要求の絞り込み時に、優先すべき業務要求を落としてしまい、後続のプロセスや工程で要件追加が発生する可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-201-2-01	「業務課題一覧」に定義した業務課題の解決手段と整合した業務要求事項が、漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	「業務課題一覧」の“解決手段”と“業務要求一覧”の要求内容”を突き合わせて検証する。 ※“DG-201-2-01”と“DG-201-2-02”は、合わせて検証すると効率が良い。	後続のプロセスや工程で業務要求の抽出漏れが発覚し、業務要件定義を再実施することになる可能性がある。	
			必要性 追跡可能性	DG-201-2-02	現行の業務課題との関連性が明確であること。	○	G2-01-02 業務要求の確認	業務要求の発生元である解決手段のIDが「業務要求一覧」の“関連解決手段ID”に正しく定義されていることを検証する。 ※“DG-201-2-01”と“DG-201-2-02”は、合わせて検証すると効率が良い。	業務要求の発生元となる現行課題が不明確になることで、業務要求の必要性の判断が難しくなり、業務要求の優先順位付けを誤ってしまう可能性がある。	
			一貫性	DG-201-2-03	「業務要求一覧」の業務要求は、業務要件定義のいずれかのモデルで表現されていること。	○	G4-01-02 業務要件の検証	「業務要求一覧」の“要求内容”と“業務要件定義成果物”を突き合わせて検証する。 ※“DG-201-2-03”と“DG-201-2-04”は、合わせて検証すると効率が良い。	後続工程で、業務要件の実装漏れが発生する可能性がある。	
			追跡可能性	DG-201-2-04	業務要求をモデル化した成果物との関連性が明確であること。	○	G4-01-02 業務要件の検証	業務要求内容を具体化したモデルのID・名称が「業務要求一覧」の“関連モデル”に正しく定義されていることを検証する。 ※“DG-201-2-03”と“DG-201-2-04”は、合わせて検証すると効率が良い。	業務要求変更時の業務モデルの変更漏れや業務要求が漏れなくモデル化されているかの確認が難しくなる可能性がある。	
DG-202	ビジネスモデル定義	単体	無曖昧性	DG-202-1-01	お客さまのビジネスの仕組み(事業戦略や収益構造)と整合し、明確に表現されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「ビジネスモデル定義」の定義内容を検証する。 モデル内の9つのブロックに記述された内容間の関係を確認し、全体として整合性を保っていることを確認すると良い。	ビジネスモデル定義の漏れや誤りは、誤った業務課題・業務要求の理解に繋がる可能性がある。	
DG-203	組織一覧	単体	完全性	DG-203-1-01	業務に関係する組織が漏れなく、正しい名称で定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「組織構成図」の組織構造および“組織名”を検証する。	組織が漏れることにより、検討すべき業務の漏れが発生する可能性がある。	
			無曖昧性	DG-203-1-02	組織の役割(担当業務)が、明確であること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「役割一覧」の“担当業務”を検証する。	組織の役割が不正確であることにより、業務作業担当者の誤りが発生する可能性がある。	
DG-204	用語集	単体	完全性	DG-204-1-01	ステークホルダー間で認識を合わせる必要がある業務用語が漏れなく、意味説明が正しく曖昧さなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	お客さま業務内の専門用語、一般的な意味と異なる意味で使用される用語、示す範囲や対象等の厳密な定義が求められる用語、要件定義の過程でステークホルダー間で解釈の相違が発生した用語などが漏れなく定義されているか、「用語集」の“用語名”を検証する。	用語の不一致によりステークホルダー間で業務要件の認識齟齬が発生し、誤った業務要件を定義してしまう可能性がある。	

成果物		区分		検証観点		重要検証ポイント	検証タイミング	検証方法	影響例	備考
ID	名称	検証区分	特性区分	ID	内容					
DG-205	業務階層定義	単体	無曖昧性	DG-205-1-01	個々の業務スコープ内容(業務の開始から終了までのスコープ)が明確であること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務階層定義」の“業務概要”を検証する。 業務が何を以って始まり、何を以って終わり、その間に行われる主要な仕事の説明がされていることが望ましい。	個々の業務フローで定義すべき業務作業範囲が不明確になり、業務作業の重複や欠落が発生する可能性がある。	
			完全性	DG-205-1-02	対象業務範囲の業務が、階層的に漏れなく、重複なく定義されていること	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務階層定義」の“業務名称”を検証する。 ※“DG-205-1-02”と“DG-205-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	定義すべき業務が欠落した、不完全な業務要件を定義してしまう可能性がある。	
		関連	一貫性	DG-205-2-01	複数レベルの「データフロー」でモデル化した業務階層構造と、「業務階層定義」でモデル化した業務階層構造が一致すること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	同一レベルの「データフロー」と「業務階層定義」を突き合わせ、双方の下層に定義されている“プロセス”、“業務名称”が一致することを検証する。 ※“DG-205-1-02”と“DG-205-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい業務要件が何であるかが分からなくなる可能性がある。	
DG-206	データフロー	単体	一貫性	DG-206-1-01	対象業務範囲のデータフローが、業務階層分割基準に適合したレベルで階層的に定義されていること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「データフロー」の各階層の“プロセス”粒度を検証する。	定義すべき業務の抽出漏れが発生し、不完全な業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-206-1-02	各業務に関連するデータストアが漏れなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「データフロー」の“データストア”を検証する。 業務要件定義の段階で、実装に対する不要な制限を避けるため、データストア名には“xxファイル”、“xxテーブル”等の方法を示す名称を付けないことが望ましい。	業務で扱うデータが欠落し、概念データモデルに定義すべき概念エンティティが漏れる可能性がある。	
			完全性	DG-206-1-03	業務とデータストアの／Ｏ関係が正しいこと。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「データフロー」の“データの流れ”を検証する。 データストアと／Ｏ関係にある業務の内容から、データフローに記載された／Ｏ関係が適切であるか判断する。	業務で扱うデータが不正確になることで、その業務で利用するシステム機能内容を誤って定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-206-1-04	業務実施に必要な情報をもたらす外部エンティティが漏れなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「データフロー」の“外部エンティティ”を検証する。	外部IF機能が漏れる可能性がある。	
			完全性	DG-206-1-05	各階層毎のデータフローで定義された業務データの流れが妥当であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「データフロー」の“データの流れ”を検証する。	業務で扱うデータの流れが不正確になることで、その業務で利用するシステム機能内容を誤って定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-206-1-06	プロジェクトで定義したデータフローの表記法を遵守していること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	プロジェクトで定義した「データフローの表記ルール」と作成した「データフロー」を突き合わせて検証する。	表記ルールが統一されないことで、ステークホルダー間の解釈に認識齟齬が発生し、正しくない業務要件を定義してしまう可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-206-2-01	関係する上層と下層のデータフローが、整合した内容であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	上層のデータフローと上層の各プロセスを具体化した下層のデータフローを突き合わせて検証する。 データストアや外部エンティティなどの各要素の単位で不整合がないことを確認するとよい。	データフローから作成する業務階層定義や概念データモデルに誤りや漏れが発生し、不完全な業務要件を定義してしまう可能性がある。	
			完全性 一貫性	DG-206-2-02	「業務要求一覧」の要求事項と整合したデータフローであること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務要求一覧」の“要求内容”のうち、業務プロセス・業務データに関する要求事項を抽出し、「データフロー」と突き合わせて検証する。	業務要求を実現できないシステムを構築してしまう可能性がある。	
DG-207	業務フロー	単体	完全性	DG-207-1-01	個々の業務フローで必要となる業務作業が漏れなく定義されていること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業”を検証する。 業務フローに記述された一連の業務作業を以って、インプットからアウトプットを出すための業務を回せること(実現性)が説明できるか確認する。	業務作業が漏れることで、システム機能が漏れる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-207-1-02	業務作業の順序関係・業務作業の実施日時やサイクルが明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業遷移”と“フェーズ”を検証する。 「業務面から見た順序関係の論理的整合性」の確認や、プロジェクトメンバーの業務知識保有度などから必要と判断した範囲で「順序関係の意味、理由」「実施日時やサイクルの意味、理由」が明記されていることを確認する。	業務作業の順序性や実施日時などが誤ることで、システム機能内容を誤って定義してしまう可能性がある。	
			無曖昧性	DG-207-1-03	個々の業務作業内容・業務作業のアクターが明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業”が配置されたスイムレーン(アクター)を検証する。 業務作業内容はアクターがインプットを得て、アウトプットを得る過程、特にシステムUI機能を使って行うことが明確であることを確認する。業務内容が複雑・難解な場合は、別途ユースケースシナリオ等で明確にされていることを確認する。	システム機能の権限管理(利用制限)等を誤って定義してしまう可能性がある。	
			無曖昧性	DG-207-1-04	個々の業務作業のインプット・アウトプットが明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“帳票”、“連携データ”などのインプット・アウトプットを検証する。 業務作業内容と論理的に整合することを確認する。	業務作業のインプット・アウトプットを誤ることで、システム機能内容を誤って定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-207-1-05	業務作業の並行性が、考慮されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業遷移”を検証する。 並行で実施する業務作業が、業務フロー上に適切に表現されていることの確認に合わせ、他に並行で実施可能な業務作業がないかの検証も行うと良い。但し、並行作業として定義した業務作業については、実業務上で実現可能であることの確認も合わせて行う。	並行で利用されることになるシステム機能間の相互影響の考慮漏れが発生し、実業務で使えないシステム機能になってしまう可能性がある。	
			無曖昧性	DG-207-1-06	システム化対象の業務作業が明確であり、その業務作業の実施を支援するシステム機能も明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業”に対する“システム機能”を検証する。 “業務説明”に記述された、アクターがシステム機能を使って行うことと、業務フロー上で該当業務作業に割り当てられている“システム機能”が整合していることを確認する。	業務作業の実施に必要なシステム機能の漏れや、業務作業の実施に貢献しないシステム機能を開発してしまう可能性がある。	
			無曖昧性	DG-207-1-07	“業務作業遷移”の条件分岐(業務の流れに関するビジネスルール)が明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務フロー」の“業務作業遷移”を検証する。 実業務における分岐点とその判断条件、分岐先の業務作業の違い、等が明確であることを確認する。	システム機能の前提となる条件分岐が不正確であることで、システム機能内容を誤って定義してしまう可能性がある。	
			完全性	DG-207-1-08	プロジェクトで定義した業務フローの表記法を遵守していること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	プロジェクトで定義した「業務フローの表記ルール」と作成した「業務フロー」を突き合わせて検証する。	表記ルールが統一されないことで、ステークホルダー間の解釈に認識齟齬が発生し、正しくない業務要件を定義してしまう可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-207-2-01	「業務要求一覧」の要求事項と整合した業務フローであること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務要求一覧」の“要求内容”のうち、業務プロセスに関する要求事項を抽出し、「業務フロー」と突き合わせて検証する。	業務要求を実現できないシステムを構築してしまう可能性がある。	
			完全性 一貫性	DG-207-2-02	「業務階層定義」に定義した業務の業務フローが漏れなく作成されていること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務階層定義」の“業務名称”から業務を抽出し、その「業務フロー」が存在するかを突き合わせて検証する。 「業務階層定義」の全業務のフロー作成が必須なのではなく、業務の難易度や理解度等を踏まえて、プロジェクトとしてフロー作成対象外業務を判断してよい。	抑えるべき業務仕様が漏れることにより、業務作業の実施に必要なシステム機能の漏れや、業務作業の実施に貢献しないシステム機能を開発してしまう可能性がある。	
			一貫性	DG-207-2-03	「アクター一覧」に未定義のアクターが、「業務フロー」のアクター名で使用されていないこと。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「アクター一覧」の“アクター名”と「業務フロー」の“アクター名”を突き合わせて検証する。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい業務要件が何であるかが分からなくなる可能性がある。	
			完全性 一貫性	DG-207-2-04	「イベント一覧」に定義した業務イベントが、業務フローに漏れなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「イベント一覧」から業務イベントを抽出し、「業務フロー」と突き合わせて検証する。 どの業務とも関連付かない業務イベントがあった場合、「業務階層定義」上の業務や、「業務フロー」上の業務作業の抽出漏れがないか確認する。	単にイベント一覧の誤りでない場合、業務作業が漏れていることになるため、システム機能の漏れに繋がる可能性がある。	
DG-208	イベント一覧	単体	完全性	DG-208-1-01	業務・システムに関するイベントが漏れなく、重複なく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「イベント一覧」の“イベント”を検証する。 イベントを完全に洗い出すことは難しいため、業務マニュアルなどに記載された主要なイベントが網羅できていることを確認する程度に留める。	業務フローの業務作業や状態遷移モデルのイベントが漏れるため、システム機能の漏れに繋がる可能性がある。	
DG-209	状態遷移モデル定義	単体	完全性	DG-209-1-01	状態遷移モデルの作成対象が、漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「概念データモデル」から状態遷移を伴う属性を抽出し、「状態遷移一覧」と突き合わせて検証する。実業務の視点からも、状態遷移を伴う対象に不足がないか確認する。	システム機能の抽出漏れに繋がる可能性がある。	
			完全性	DG-209-1-02	状態遷移モデルで表現された状態とその遷移フローが妥当であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「状態遷移遷移図」の“状態”と“状態遷移”の関係を検証する。 特定状態間の遷移可否、遷移条件/イベントが実業務と整合することを確認する。例外的な遷移の抽出漏れに重点を置いた確認を行うと良い。	システム機能の抽出漏れ・内容誤りに繋がる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-209-1-03	状態遷移のトリガーとなる業務イベント及び状態遷移させる業務システム機能が明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「状態遷移図」の“トリガー(イベント)”と“アクション(システム機能)”の定義内容を検証する。	システム機能の抽出漏れに繋がる可能性がある。	
			完全性	DG-209-1-04	状態遷移モデルで表現された遷移不可パターンが、現行業務の実態と整合していること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「状態遷移表」から遷移不可パターンを抽出して検証する。	システム機能の抽出漏れに繋がる可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-209-2-01	「イベント一覧」に定義した状態遷移を伴うイベントが、状態遷移モデル定義に漏れなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「イベント一覧」から状態遷移を伴うイベントを抽出し、「状態遷移図」と突き合わせて検証する。	単にイベント一覧の誤りでない場合、状態遷移が漏れていることになるため、システム機能の漏れに繋がる可能性がある。	

成果物		区分		検証観点		重要検証 ポイント	検証タイミング	検証方法	影響例	備考
ID	名称	検証区分	特性区分	ID	内容					
DG-210	業務ルール定義	単体	完全性	DG-210-1-01	各業務に関する業務ルールが、漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G2-02-03 業務ルールのモデル化	「業務ルール一覧」の定義内容を検証する。 業務階層定義上の業務や業務フロー内の業務作業と業務ルールの関係を整理し、業務ルールの網羅性、充足性を検証すると良い。同様に業務や業務作業ごとに、業務ルール種類別に抽出済みルールを整理すると、ルール未抽出の種類に対するその妥当性を確認しやすい。	システム機能のビジネスロジック実装漏れに繋がる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-210-1-02	定義した業務ルールの内容が、明確であること。	○	G2-02-03 業務ルールのモデル化	「業務ルール定義」の定義内容を検証する。 業務ルールが示す「適用対象」「制限」「条件」「計算式」「ロジック」「例外」「範囲」等が、図表や式などで明確に定義されていることが好ましい。	システム機能のビジネスロジック実装誤りに繋がる可能性がある。	
			法令遵守	DG-210-1-03	法律や規制に準拠した業務ルールが定義されていること。	○	G2-02-03 業務ルールのモデル化	準拠する法律や規約を定義した資料と「業務ルール定義」を突き合わせて検証する。	システム機能のビジネスロジック実装誤りに繋がる可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-210-2-01	「業務要求一覧」の要求事項と整合した業務ルールになっていること。	○	G2-02-03 業務ルールのモデル化	「業務要求一覧」の“要求内容”のうち、業務ルールに関する要求事項を抽出し、「業務ルール定義」を突き合わせて検証する。	業務要求を実現できないシステムを構築してしまう可能性がある。	
DG-211	概念データモデル定義	単体	完全性	DG-211-1-01	業務で取り扱う概念データが漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G2-02-04 業務データのモデル化	「概念データモデル定義」の“概念エンティティ”と“主要な項目”を検証する。 「各業務モデル」から業務で取り扱う概念データを整理し、「概念データモデル定義」の“概念エンティティ”と“主要項目”に突き合わせて確認すると良い。また実業務の視点からも、取扱う概念データに不足がないか確認する。	概念エンティティやその主要項目が漏れることで、業務作業やシステム機能の漏れ・誤りが発生する可能性がある。	
			完全性	DG-211-1-02	業務で取り扱う概念データの関係性が妥当であること。	○	G2-02-04 業務データのモデル化	「概念データモデル定義」の概念エンティティ間の“関連性”と“多重度”を検証する。 関連性や多重度にはビジネス/業務のルールや考え方が現れるため、ビジネス/業務の視点から概念データのERモデルの内容妥当性を確認すると良い。	概念エンティティ間の関係性に誤りがあることで、誤ったシステム機能を開発してしまう可能性がある。	
		関連	完全性 一貫性	DG-211-2-01	「業務要求一覧」の要求事項と整合した概念データモデルになっていること。	○	G2-02-04 業務データのモデル化	「業務要求一覧」の“要求内容”のうち、業務データに関する要求事項を抽出し、「概念データモデル定義」を突き合わせて検証する。	業務要求を実現できないシステムを構築してしまう可能性がある。	
			一貫性	DG-211-2-02	「データフロー」のデータストアーと「概念データモデル」の概念エンティティが、整合していること。		G2-02-04 業務データのモデル化	「データフロー」からデータストアーを抽出し、「概念データモデル定義」の“概念エンティティ名”と突き合わせて検証する。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい情報が何であるかが分らなくなる可能性がある。	
DG-212	システム機能一覧	単体	完全性	DG-212-1-01	業務モデルから抽出したシステム機能が、システム機能一覧に漏れなく、重複なく定義されていること。	○	G2-02-05 システム機能のリストアップ	「各業務モデル」に現れているシステム機能が、「システム機能一覧」に漏れなく定義されていることを検証する。 ※“DG212-1-01”～“DG212-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	システム機能一覧に定義すべきシステム機能が漏れることで、開発工程の見積りが過小になる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-212-1-02	システム機能に求められる処理内容が、明確であること。	○	G2-02-05 システム機能のリストアップ	「各業務モデル」内でシステム機能を使って行う業務作業や必要な機能内容と「システム機能一覧」の“システム機能概要”が整合することを検証する。 ※“DG212-1-01”～“DG212-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	システム機能に求められる処理内容に誤りがあることで、誤ったシステム機能を開発してしまう可能性がある。	
			追跡可能性 必要性	DG-212-1-03	システム機能を利用する業務が明確であること。 (システム機能の必要性が明確であること。)	○	G2-02-05 システム機能のリストアップ	「システム機能一覧」で機能毎に記録された“関連業務ID”が、業務モデル側に漏れなく存在し、当該システム機能を使用する内容になっていることを検証する。 ※“DG212-1-01”～“DG212-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	システム機能の業務上の必要性が不明確になり、業務利用されないシステム機能を開発してしまう可能性がある。	
		関連	一貫性	DG-212-2-01	「各業務モデル」と「システム機能一覧」のシステム機能名が整合していること。		G2-02-05 システム機能のリストアップ	各業務モデル(業務フロー、状態遷移モデルなど)に定義した“システム機能名”とシステム機能一覧の“システム機能名”を突き合わせて検証する。 ※“DG212-1-01”～“DG212-2-01”は、合わせて検証すると効率が良い。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい情報が何であるかが分らなくなる可能性がある。	
DG-213	CRUD	単体	完全性	DG-213-1-01	概念エンティティのライフサイクル(Create/Read/Update/Delete)に対応づく、システム機能が漏れなく定義されていること。	○	G2-02-05 システム機能のリストアップ	「CRUD図」上のエンティティのアクセス種別(CRUD)に対する、システム機能の網羅性を検証する。	システム機能一覧に定義すべきシステム機能が、漏れる可能性がある。	
			完全性	DG-213-1-02	システム機能実現の観点から必要となる概念エンティティが漏れなく定義されていること。	○	G2-02-05 システム機能のリストアップ	「システム機能一覧」に定義した“システム機能概要”を踏まえて、関連する概念エンティティを機能単位に再整理した結果と、「CRUD」に定義した“システム機能”と“概念エンティティ”の関係性を利用して検証する。	概念データモデルに定義すべき概念エンティティが、漏れる可能性がある。 これは、システム機能内容の誤りなどに繋がる可能性がある。	
DG-214	アクター一覧	単体	完全性	DG-214-1-01	業務作業を行うアクターが漏れなく定義されていること。 (システムを直接利用しないアクターも含む)		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「アクター一覧」の“アクター名”を検証する。 「ステークホルダー定義」や「組織一覧」と突き合わせて、必要なアクターが漏れなく適切な名称で定義されていることを確認すると良い。	アクターが漏れることで、業務フローで定義すべき業務作業が漏れる可能性がある。 これは、業務作業を支援するシステム機能の漏れにも繋がる。	
			完全性	DG-214-1-02	連携する外部システムがアクターとして漏れなく定義されていること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「アクター一覧」の“アクター名”を検証する。	連携する外部システムが漏れることで、システム機能一覧で定義すべき外部IF機能が漏れる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-214-1-02	アクターの役割が明確であること。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「アクター一覧」の“アクター説明”を検証する。	アクターの役割定義が不適切であることで、業務フローにおける業務作業を担当するアクターの設定誤りが発生する可能性がある。	
DG-215	業務俯瞰図	単体	完全性	DG-215-1-01	業務全体の業務間の関係および入出力情報、社外アクターとの関係が、漏れなく定義されていること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務俯瞰図」の“業務間の関係”、“社外アクターとの関係”を検証する。 「システム企画資料」や「RFP」などに記述された“業務俯瞰図”や“システム俯瞰図”などと突き合わせ、各関係性が漏れなく定義されていることを確認すると良い。	業務俯瞰図の漏れや誤りは、誤った業務課題・業務要求の理解に繋がる可能性がある。	
			無曖昧性	DG-215-1-02	要件定義の対象業務範囲が、明確であること。	○	G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務俯瞰図」の“要件定義対象業務範囲”を検証する。 表現された業務内に対象範囲と対象範囲外が混在するような曖昧性がなく、境界が明確であることを確認すると良い。	対象業務範囲の認識齟齬により、検討すべき業務課題・業務要求が漏れる可能性がある。	
		関連	一貫性	DG-215-2-01	「業務階層定義」に未定義の業務名が、「業務俯瞰図」の業務名で使用されていないこと。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「業務階層定義」に定義された一定階層の“業務名”と「業務俯瞰図」の“業務名”を突き合わせて検証する。 ただし、チェックする範囲は、要件定義対象業務範囲とする。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい情報が何であるかが分らなくなる可能性がある。	
			一貫性	DG-215-2-02	「アクター一覧」に未定義のアクター名が、「業務俯瞰図」のアクター名で使用されていないこと。		G2-02-02 業務プロセスのモデル化	「アクター一覧」に定義された一定階層の“アクター名”と「業務俯瞰図」の“社内アクター名”、“社外アクター名”を突き合わせて検証する。 ただし、チェックする範囲は、要件定義対象業務範囲とする。	成果物間の一貫性がなくなり、正しい情報が何であるかが分らなくなる可能性がある。	
DG-301	業務要件定義書	—	—	—	※チェック項目については、各成果物の項目参照。		G4-01-02 業務要件の検証	—	ベースラインとなる業務要件定義書の不備により、後続工程で手戻りが発生してしまう可能性がある。	
DG-401	検証結果	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-402	妥当性確認結果	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-403	合意記録	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-404	承認記録	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-501	申し送り事項一覧	—	—	—	—	—	—	—	—	—
DG-502	システム要求一覧	—	—	—	—	—	—	—	—	—